



Data

監督・脚本・製作・編集: ミシェル・フランコ

出演: エマ・スアレス/アナ・パレリア・ベセルル/エンリケ・アリソン/ホアナ・ラレキ/エルソン・メンドーサ

■■■ショートコメント■■■

◆まず、「母という名の女」という邦題がすごい。本作は、『或る終焉』（『シネマ 38』未掲載）のメキシコ人監督ミシェル・フランコが、母娘の確執をテーマとして描き、第70回カンヌ国際映画祭の「ある視点部門」で審査員賞を受賞したミステリー映画。そう聞くと、こりゃ必見！そう思ったが・・・。

◆映画は冒頭、メキシコのリゾート地パジャルタの海沿いに建つ自宅兼レストランで朝食の支度をしている姉のクララ（ホアナ・ラレキ）の姿を映し出すが、その背後の部屋では朝っぱらから男女の絡みの声が……。コトが終わって部屋から素っ裸で出てきたのが、大きくお腹の膨らんでいる妹のバレリア（アナ・バレリア・ベセルル）と、そのお相手でもこれ17歳のマテオ（エンリケ・アリソン）だ。

バレリアは本気で子供を産み、2人は結婚するつもりのようなのだが、ちょっと若すぎるのでは？姉のクララは出産を認めているようだが、バレリアの父親は？そして、母親のアブリル（エマ・スアレス）は？

◆自分自身も若くして子供を産み、今は夫と離婚し、子供たちとも疎遠になっていたアブリルが、突然臨月を迎えるバレリアのために戻ってきたのは意外。そして、バレリアの出産をあっけなく認めたのは、もっと意外だ。

てなわけで、バレリアは無事女の子・カレンを出産したが、その子育ては・・・？

◆赤ちゃんを産むのは容易だが、育てるのは大変。17歳のマテオとバレリアはそれを思い知ったが、2人に代わってテキパキと子育てをこなしたのが、今なお美しさを保っているアブリルだ。アブリルにとっては生まれたばかりのカレンはもちろん、マテオもかわいい男の子みたいなもの。まずは、カレンをバレリアから取り上げるべく、養子縁組の手続きをすると、次はマテオにもターゲットを！しかし、ターゲットって、一体何のターゲット

ト・・・？

◆「母」の中には、母性だけでなく女の部分が含まれているのは当然だが、アブリルの場合はその両方ともすごい。カレンをかわいがる時は自分の娘をかわいがる母親と同じだが、マテオと接する時は女そのものになっていく。なるほど、これが「母という名の女」の正体か！

アブリルの手によってカレンは別の町に住むかつての家政婦の下に預けられたため、実の母親であるバレリアはカレンと会うこともできず、マテオも事実上奪われたままだ。そのため、そのイライラと、母親・アブリルへの怒りは極限状態だが、さあ、その後の展開は？それは、あなた自身の目でしっかりと。

2018（平成30）年6月25日記